

風呂上がりに二人でワインを飲む。

僕はあまりお酒が強い方ではない。

サヤカは可愛らしい顔からは想像できないくらい強いのだ。

付き合いだして始めてのクリスマス、小洒落たバーで待ち合わせたことがあった。たくさん飲んで食べて、僕は帰る頃には酔っぱらってフラフラだった。サヤカは何ともないようで、赤い顔をした僕を部屋まで送り届けてくれたことを憶えている。

台風は相変わらず猛威を振るっている。雨はさほど降っていないが風がとても強く、先ほどから僕たち二人のテンションを上げてくれる。

ワインでいい感じに火照った二人はベットに転がり込んで愛し合う。今日は台風のせいでもとても激しく求め合う。

行為を終えた後、二人の体はお互いの体液でびしょ濡れになった。

僕がサヤカに対して放出する体液の量は半端ではない。

そしてサヤカが僕に対して分泌する体液の量もオネシヨをしたのかと思うくらい多い。やはりお互い愛し合っている証拠なのだ。

この後、僕たちはシャワーも浴びずに眠りについた。本当に疲れきつたのだ。眠りにつく前、最後に耳にした音は、やはり風の音だけだった。

誰かが僕の口に覆い被さつてこようとしている。色白の彼女は僕の上に乗る、両腕を押さえつけてきた。

シーマスターの腕時計が白熱灯に照らされ、目が痛いくらいに輝いている。

そして艶かしい唇が僕の唇を塞ぐ。とても優しく濃厚なその一對のタラコに僕はもうだめになりそうだった。

飛び起きると時計の針は五時五分を指していた。

外は昨夜とうって変わって静まり返っていた。台風は過ぎ去つたのだろうか。それにしても奇妙な夢を見たものだ。

夢判断というものがあるが、それではこの夢をどう解釈するのだろうか。そんなことを考えている内に、今日は会社で嫌な会議があることを思い出す。

とても憂鬱だが仕方がないので、少し早いが起きることにした。

サヤカはまだ隣で眠っている。細くしなやかな髪がさらりと頬にうなだれている。

起こさないようにベットから立ち上がり、キッチンに向かつてコーヒーを煎れる支度をする

のであった。

#20

今日は曇り空だ。台風が去ったばかりで大きな雲から小さな雲まで上空を速い速度で移動している。

駅に着くと傘を持った人もいる。僕はいつも折り畳み式の傘を携帯しているので何時雨が降ろうが大丈夫だ。

今朝は早くから目を覚ましたので幾分か眠たいのだが、今日ある会議のことを考えると極度のストレスが込み上げてくるため、ウトウトともできないでいる。

そうこうしている内に彼女がやって来た。いつもより少し遅く来た彼女はスリムなジーンズをインブーツで決めていた。

僕に気付くと軽く会釈をした。きっと僕は会議のことを考えていたのでムツとしていただろう。

慌てて僕も笑顔を作り会釈した。

昨夜の夢を思い出すとなんだか罪悪感のようなものを感じたが、夢なので仕方がないと自分に言い聞かせた。

でも、ついつい彼女の細い腕と唇に視線がいつてしまうのでなんとか目を逸らすのに苦勞する。

電車が出発した。数駅通過する頃に、僕は突然睡魔に襲われる……。

気がつくと電車は程々に込み合っていた。もうすぐ彼女の降りる駅だ。

鼻声で車内アナウンスが流れる。

「お急ぎのところ、本日電車が遅れましたことをお詫びいたします」

時計に目をやると、五分ほど遅れたようだった。

ふと彼女に目をやると、立ち上がってこちらの方に向かって歩いてくる。そして僕の目の前を通過するとき電車が大きく揺れたため、彼女は僕の膝の上へ倒れ込んできた。

「すみません」

彼女はいい香りを放ちながらはにかんだ表情で僕に言った。僕は咄嗟に何かうまい言葉でも言えればと思い、出た言葉が、

「大丈夫ですか。お氣をつけて」
だった。

倒れてきたことに対する『氣をつけて』ではなく、『氣をつけて行つてらっしゃい』のつもりだった。

彼女は笑顔で立ち去って行った。

しかし、この香りは何処かで匂ったことがある。

そう、思い出したぞ。確か『エタニティー』と言う名のフレグランスだ。

僕は少しだけうれしくなってきた。

香水の名を思い出したからなのだろうか。それとも彼女が倒れ込んできたとき、彼女の手が僕の腕を掴んだからなのだろうか。僕にはよく分からなかった。

#21

金曜日の午後は、気分が軽くなる。明日から休日だと思おうと嫌なことも吹っ飛びそうだ。

既に十六時頃にはやるべき仕事を片付けていたので、少し時間が余ってしまった。

「そうだ。明日、あそこに行ってみようかな」

最近、思ったことが口から勝手に出ているときがある。勿論小声であるのだが、独り言が多くなってきたような気がする。

あのメールマガジンのことも問いただしててみようと思う。三階の窓から夕日が見える。紅く染まる空を眺めていると色々なことを考え込んでしまう。当然のことながらあのメールマガジンの最後に書かれていた、『タントウ、ミシタ・キョウコ』のことも。

不思議と忘れることができないフレーズだ。

次の瞬間には、無意識に坂本晃三から貰った名刺を取り出し、ダイアルしている自分に気付く。

呼び出し音が一度だけなるとすばらしい声の女性が出た。

「お電話有り難うございます。こちら奈良市役所内、奈良史跡文化研究室でございます」

まるでワイングラスを弾いたような抜けと透明感のある声に驚いてしまい、僕は何て言おうか戸惑ってしまう。

「あの、坂本晃三先生をお願いしたいのですが。夏岡と申します」

僕は詰まらずに言うことができた。

「坂本でございますね。ただいまお繋ぎ致しますので、このまま暫くお待ちください」

お手本のような発音と言い回しが本当にすばらしく、また非常に好感が持てる。電話が保留されている間、ぶつきらぼうな電子音で『エリーゼのために』が流れている。

窓からの紅い夕日が薄暗い夕暮れに変わろうとしているとき、受話器から男性の声が発せられた。

「お待たせ致しました。坂本でございます」

受話器から聞こえる坂本晃三の声もなかなかどうして、適度に低音で品があり、すばらしい声の女性に引けを取らないではないか。

僕は少し感心しながら言った。

「こんにちは。お忙しいところすみません。夏岡です。先般、書店の前でお会いし・・・」
「やあ。こんにちは。そんなに気を使わなくても結構ですぞ。こちらは普通の会社と違ってのんびりやってますから」

僕が言い終える前に坂本晃三は話しだした。

「所で明日の土曜日にそちらにお伺いしようかと思いましたが」

僕は用件を伝えた。結局、この電話で坂本晃三は歴史の話や明日の天気、気温について一方的喋り、最後に明日の午前九時に奈良史跡文化研究室で会うことを約束したのであった。

続く